

グリムの語り手たちとそのレパートリー

第 2 部

小澤俊夫

グリム兄弟が『子どもと家庭のメルヒェン集』Kinder-und Hausmärchen (以下 KHM と略す) を編むにあたって、話を聞せてもらった語り手たちとしては、第一部に掲げた人々以外にも、重要な人物・家庭がある。第一部と同様、それらの人物・家庭の来歴を、可能な限り明らかにし、個々の語り手のレパートリーを整理することとする。次の段階で、各語り手の特質を明らかにせんためである。

第3章 その他の初期の語り手たち

第1節 マンネル家 Mannel

マンネル家の人では、娘フリーデリケ Friederike (1783年7月13日生れ、1833年3月19日没) が、早くからグリム兄弟に話を提供していた。

父ヨーハン・アダム・マンネル Johann Adam Mannel (1758年～1834年) は、ヘッセン王国のヴェールスハウゼン Wehrshausen 出身。ヘルスフェルト郡 Hersfeld のヒルメス Hilmes で牧師をしていた。娘フリーデリケはここで生まれた。母アンナ・マリーア (旧姓ローゼン克蘭ツ) Anna Maria Rosenkranz (1755年～1830年) は、ベブラ Bebra 近郊オーバーズール Obersuhl 出身。

父ヨーハンは、1788年、ランツブルク Landsburg 近郊のアレンドルフ Alendorff の牧師に任命された。彼はその地の牧師館で、私塾を開いていた。クレメンス・ブレンターノ Clemens Brentano は、聖歌隊指揮者ライヒャルト Reichardt を通して、この牧師一家と知合いになったようである。

娘フリーデリケは、ブレンターノが計画していた『少年の魔法の角笛』第二巻のために、民謡を送っているが、その日付は、1807年10月22日となっている。

従ってグリム兄弟にとっても、知合いになったのは、早い時期であったものと思われる。ブレンターノは、1808年9月、ヴィルヘルム・グリムをアレンドルフに招いている。

1810：26番「ひとつのメルヒェン、ひろい子、わるい台所女」“Ein Märchen, Fündling, Böse Köchin”。フリーデリケが仲立ちして入手した話。

森林官が、木の上に子供が捨てられているのをみつけて連れ帰り、自分の子レーンヒェン Lehnchen と共に育てる。捨て子カール Karl とレーンヒェンは大の仲良しになる。台所女が水をたくさん汲んできて、明日はカールを煮殺すのだとレーンヒェンに打ち明けたので、ふたりは逃げ出す。台所女は男たちにふたりを追わせる。ふたりは、ばらの木と花に変身する。男たちが空しく戻って、ばらの木と花しかなかったと報告すると、台所女は、それを取ってくるべきだったと責め、再び追わせる。ふたりは今度は教会と、その中のシャンデリアに変身し、男たちは再びだまされて戻る。台所女は怒って自分で追いかける。ふたりが池とかもに変身しているので、台所女は水を飲みほそうとする。しかし、かもがその頭を引っばって、彼女を溺死させ、ふたりは無事、自宅に帰り、幸せにくらす。主人公はふたりの女の子。相手は魔女的な女。厄難を克服して幸せな生活を獲得。

この話を書き留めた人は、筆跡からみてフリーデリケではなく、不明である。フリーデリケはそれをグリム兄弟に送ったにすぎない。グリム兄弟はこの原稿を「シュヴァルム地方より」としている。「ひろい子」という題をつけたのはヤーコブである。1812年版以来、「ひろい子」と題して51番におかれている。クレメンス・ブレンターノも、1810年に、これとたいへん似た話を聞き書きしている。

1810：46番「ひとつのメルヒェン、4月6日、口のきけない娘」“Ein Märchen, den 6^{ten} April, Das stumme Mädchen”

子だくさんの貧しい男が、貧しさゆえに首をくくろうとすると、黒ずくめの四頭立ての馬車が着いて、黒ずくめの女が降りてくる。そして、自宅の草むらにお金があると言う。しかしその代りに、うちにかくされてあるものを女に与えることを約束させられる。帰宅してみると、妻は妊っていた。生れた娘が12歳になったとき、黒い女が娘を森の中の一軒家へ連れ去る。娘はそこで、禁じられた部屋をのぞいたため、言葉を奪われて、追放される。王子が現われて結婚し、子が生れるが、王子の母は子を奪い、若い王女の口許に血をぬりつけて、王女が子を食べたと中傷する。三度、同じことが起き、王女が火刑に処せ

られる瞬間、黒ずくめの馬車が現れ、黒ずくめの女が火を消し、再び言葉を与え、子供たちを返してくれる。黒ずくめの女は、呪いをかけられていたが、王女によって救われたと言う。王子の母は、悪意と嫉妬のために、窒息して死ぬ。主人公は娘。相手は黒衣の女と王子とその母。王子との結婚成就。

1812年版以来3番に位置する「マリアの子」“Marienkind”と同じ話だが、そちらは、1807年にグレートヒェン・ヴィルトが語ったものを、ヴィルヘルムが記録した話である。

フリーデリケ・マンネルが1809年4月6日に、自分で記憶によって書きつけたこの話について、グリムは注釈の中で、「別話」としてあらずじを記したにすぎない。この話の類話を、クレメンス・ブレンターノは、1810年以前に記録している。

マリア（この話では黒衣の女）による禁令のモチーフは、KHMより少し早く世に出たベネディクテ・ナウベルト Benedicte Naubert の「ドイツ人の新しい昔話集」Neue Volksmärchen der Deutschen, ライプツィヒ, 1789年にも、似た形で現われている。

1810：46番後「口のきけない娘、もうひとつ別の話」“Ein andres”

ある王に3人の息子があり、ふたりは賢く、三男はおろか者である。三人共、王の財産を継ぎたいと思っている。王が、一番よいにおいをもち帰った者に跡をゆずると言う。三人はでかける。末男が一軒の家につくと、猫がいて、なぜそんなに浮かない顔をしているのかと言う。お前なんか、ぼくの力にならないよ。でも話してごらん。末男が話すと、猫が言う、もし君がわたしに……

この話は、ヤーコブの手で、ペンで線を引いて抹消されている。筆跡はフリーデリケ・マンネルである。

1810：48番「水跳びヨハネスと水跳びカスパーの話」“Vom Johannes-Wassersprung und Caspar-Waßersprung”

父王が娘を結婚させたくなくて、彼女を森の中の一軒家に隔離しておく。しかし、王女は泉の水を飲むと、妊り、男子をふたり生む。王は王子たちに狩を習わせる。ふたりは旅に出、別れ道で、木に刀をさして、それがさびたら、相手の生命に危険が迫っていることがわかるようにする。ヨハネスは、ある町で、王女が龍に食われることを知り、代って退治する。疲れて寝ているとき、王女の御者が王女を奪って帰り、自分の妻とする。死んだヨハネスは、以前に助けたことのある熊によって再び生命を与えられ、帰国して、王女の結婚式に出席し、龍の舌で、陰謀を暴露する。王女と結婚したヨハネスは、狩りに出

て、老女に石に変身させられる。兄の留守に王女の前に現れたカールは兄と見まちがえられて事態を知り、老女に迫って兄を石から解放させる。帰宅した兄弟を、王女は正しく見分けて、ヨハネスの首に抱きつく。

この話は、1805年にマンネルがグリム兄弟に提供したものである。筆跡自体はマンネルのものでなく、由来不明。1812年版では74番として採用されているが、1819年版からは削除され、注釈本で、60番「ふたり兄弟」Die zwei Brüderの「第四番めのヘッセンの話」とされているにすぎない。(60番の話は、ハクストハウゼン家の誰かが伝えたものである。) 主人公はふたりの若者。相手は王女と裏切り者。結婚の成就。

1810：48番前。「イギリスの王様の話」“Vom König von England”

三人の姉妹が、王の城の近くを散歩しながら夢のような願いごとを言う。長女は宮廷のパン焼き親方と結婚したいと言い、次女は宮廷の御膳掛長と結婚したいと言い、末娘は王様自身と結婚したいと言う。それが王の耳に入り、それぞれ、願いどおりに結婚する。王妃になった末娘は金髪の男子を生む。姉たちは嫉妬して男の子を箱に入れて川に流し、王には犬の子を見せる。次の子の出生に際しては猫、その次の娘の出生に際しては鼠を。王は怒り、妃を森の中に住まわせる。川に流された箱は、王の庭師に捨てられ、王子たちは育てられる。庭師が死んだ後、老女が現れ、庭には、歌う木と話す鳥と金色の水がないと言う。生命の指標となるナイフを残して長兄が捜しにでかけるが帰らない。次男も同じ。末娘が出かけ、石をめぐらせた山に来る。白ひげの老人が見張りをしているが、末娘はそのひげを切って、協力させる。老人は、山に登るには耳をふさいで、呼び声を聞かないように、そしてふり向かないようにせよと教えてくれる。末娘はそのとおりにして、木と鳥と水を見つけ、兄たちも救出して帰る。王が来て、話す鳥のことばを聞いて真実を知り、妻をとりもどす。

この話は、多分マンネルのものだと推定される。筆跡は誰のものか不明。この話は、明らかにヤコブによって斜線で抹消されているが、使われている紙の質からみて、グリム兄弟の依頼で書写されたか、記憶をたどって書き記されたことは確実である。題名のわきに、「1001夜」という鉛筆のメモがある。この判断によって、1810年版では採用されなかったのであろう。

1810：49番「家具師とろくろ師の話」“Von dem Schreiner und dem Drechsler”

家具師とろくろ師が、傑作を作れと言われる。家具師は、泳ぐ魚を作り、ろくろ師は翼を作るが、ろくろ師の作はけなされる。ある王子が翼をかしてくれ

と言う。王子は、光り輝く塔に降り、そこに住む美しい王女の部屋にひそかに入る。発見され、ふたりは火刑にされることになるが、翼で飛び去る。父王の国に帰り、王となる。王女の父が、娘を返してくれた者には、王国の半分を与えるという告示を出したのを知り、王女と共に行き、約束どおり、王国を半分もらう。

この話の筆跡も、誰のものか不明。しかしマンネルがグリム兄弟に渡したものと推定されている。この話は1812年版では77番の位置を与えられたが、その本人使用本にはQという記号が鉛筆で書かれている。これは、削除せよの意である。1819年版からは採用されず、15番「ヘンゼルとグレーテル」の注に入れられた。

マンネルが記憶によって書きつけた話、又は、仲介した話は以上6話であるが、1812年版の本人使用本には、この他に、46番「フィッチャー鳥」“Fitchers Vogel”の末尾に、「マンネルとドルトヒェン」というメモがある。そして、同様に、63番「金の子ら」“Gold-Kinder”の末尾にも「フリーデリケ・マンネル」のメモがある。

第一節のまとめ

以上のマンネルの話をもとに、保持された度合いによって分類してみる。分類の規準は、第一章のまとめにおいて掲げたとおりだが、ここに再録しておく。

A なんら手を加えられず、最初の聞き書きのまま1857年版まで保持されたもの。

B 手は加えられたが、1857年版まで保持されたもの。

C 手を加えられたが、1819年（第2）版では姿を消したもの（1812年版までしか採録されなかったもの）。

D 1812年（初）版に採録されなかったもの。

E 本文にも注釈にも記録されていないが、1812年版の本人使用本に提供者の名がメモとして記されているもの。

以上のうち、C、Dのばあいには、注釈書に入れられたものもある。

さらに主人公が誰であるかという観点と、話の結末に注目してまとめると、次の如くである。

26番「ひろい子」B、ふたりの女の子、厄難克服して幸せな生活

46番「口のきけない娘」D、注に入る。娘、王子、結婚成就。

46番後「別話」E、娘、若者、中断。

48番「水跳びヨハネスと水跳びカスパー」C, 若者, 御者, 結婚成就。

48番前「イギリス王の話」D, 娘, 姉たち, 結婚成就。

49番「家具師とろくろ師の話」C, 若者, 王女, 結婚成就。

6篇中, Bは1篇にすぎず, DとEが3篇もあるのが注目される。マンネルは, 上述の如く, グリム兄弟にとって早い時期からの協力者であったが, その提供した話は, けっして上等のものではなかったのである。

その点を度外視して, 主人公と話の結末だけに注目してみると, 主人公は6篇とも, 若い娘か若者である。そして6篇中, 4篇の結末は, 結婚の成就であり, 1篇は, 幸せな生活の確立である。断片である46番後を除いて, 他の5篇がすべて幸福で終わっていることが注目される。

マンネルの提供した話は, あまり重視されなかったものの, マンネルが提供したとき, その段階ですでに, 一種の選択がおこなわれていたことが想像される。グリム兄弟に送るメルヒェンは, こうであらねばならぬ, という気持ちが強かったとはいえないのである。民衆の間でメルヒェンが伝えられるときには, もっといろいろなタイプの話, 終り方の話があるはずである。

第二節 ラミュ (Ramus) 家の人々

ラミュ家の姉妹ジュリア Julia (1792~1862) とシャーロット Charlotte (1793~1858) は, 「12人の兄弟と妹」Zwölf Brüder und das Schwesterchen をヤーコブに対して語り聞かせたものと推定されている。

父親シャルル・フランソワ・ラミュ Charles François Ramus はカッセルでフランス人牧師として活動していた。のちにグリム兄弟にとってもっとも重要な語り手となったドロテア・フィーマン Dorothea Viehmann をグリム兄弟に紹介したのは, ラミュ姉妹であった。姉妹は, そのずっと以前からフィーマンおばさんを知っていたと考えられる。因みに, フィーマンからの聞き書きの最初の日付は, 1813年4月7日である。ヤーコブ・グリムは, 妹ロッテの友人であったハッセンプフルーク Hassenpflug 家の姉妹, エンゲルハルト Engelhard 家の姉妹, そしてラミュ家の姉妹たちが集って行い談話会で話を聞き書きし, それぞれの話の大まかな出所を記しているが, 「ツヴェールンより」aus Zwehrn と記されているものは, ドロテア・フィーマンから聞いた話を, ラミュ家の娘たちがその場で語ったものであろうと考えられる。結局はフィーマンに由来する話ということになるのである。

1810: 10番「12人の兄弟と妹」Zwölf Brüder und das Schwesterchen

筆跡はヤーコプ、話の末尾に「口伝え」*mündlich* と記されている。1810年版においてすでに、かなりていねいに語られており、メモ風ではない。この話は、1812年版では、ある程度手を入れられて、9番として採用されている。そして、1857年版まで、手入れされつつ保持されている。

第三節 マールブルクのメルヒェンおばさん *Marburger Märchenfrau*

グリム兄弟がこのように呼んでいた女性の名は不明のままである。彼女は当時マールブルク *Marburg* のエリーザベト救貧院に住んでいた。ブレンターノは1809年初夏、彼女から6～8篇のメルヒェンを聞かせてもらったことがある。そのとき彼は、話のなかのいくつかの言葉をメモしただけで、これで忘れるはずはないと思った。ところが、のちになると忘れてしまい、話としては残されなかった。⁽¹⁾ そこでグリム兄弟は、この女性から話を聞きだそうと努力したのである。妹のロッテが面会して聞きだすよう、ヤーコプから依頼されて試みたこともあったが、失敗した。この女性は、そんな話をしたら、まわりの人に笑われると思って断ったのである。1810年9月になって、ヴィルヘルム・グリムは、マールブルク大学の数学者ミュラー *Müller* 教授の世話によって、救貧院管理人夫人の手で、その女性から、二篇を聞き書きしてもらうことができた。ヴィルヘルムはその聞き書きをカッセルへ持ち帰った。ブレンターノあてに送ることになっていたメルヒェンの原稿の包みに、やっと間に合った形で加えて、ブレンターノに送られたのである。

1810年10月17日付、ブレンターノ宛ヤーコプの手紙。「御存知のように、ヴィルヘルムはマールブルクで、ほとんど何も手に入れることはできませんでした。ここにお送りする最後の二篇だけです。二つのうちでは前者がとて素晴らしい話で、また、注目に値します。」⁽²⁾

その原稿は、エーレンベルク修道院のブレンターノの遺品の中には発見されなかった。しかし、それは、1810年にブレンターノに送られた手紙の中の次の二篇であったと推定される。

50番「灰かぶり」“*Aschenputtel*”

この話は1812年版では21番として採用された。そして、1857年版まで保持されている。しかし、1819年版からは、「ヘッセンより」とされる二つの口伝えと混合されている。その一つは、「ツヴェールンより」とされているので、ドロテア・フィーマンの話と思われる。

主人公は娘、相手はまま母。王子との結婚成就。

51番「金の鳥の話」“Vom goldenen Vogel”

この話は1812年版では、57番として採用された。そして「金の鳥」Der goldene Vogel として1857年まで保持されている。「それで髪の毛がヒューヒューと鳴りました」という成句と、絞首刑者を買ってはいけないというモチーフがあるが、それは、クリスティアン・ヴィルヘルム・ギュンター Christian Wilhelm Günther の『エアフルトの子供向きメルヒェン』Erfurter Kindermärchen 1787 からとったものである。主人公は若者、動物たち、王女との結婚成就。

第三節のまとめ

ここでも、これまでと同じ観点からまとめると次の如くである。

50番「灰かぶり」B, 娘, まま母, 王子との結婚成就。

51番「金の鳥の話」B, 若者, 動物の援助, 王女との結婚成就。

1812年版が、かなりていねいに語られた文章であるところからみると、1810年の手稿もそれに近かったものと思われる。マールブルクのメルヒェンお婆さんは、よい語り手であったことだろう。しかし、二篇とも、典型的な、結婚成就の話であることは、やはり、語り手によってすでに選択された話だったことを思わせる。特に、メルヒェンお婆さんは、こんな話を語ったら、まわりの人に笑われると言って断っていたのであるから、なるべくいい話をしようと思ったのは、自然なことであろう。

第四節 フィリップ・オットー・ルンゲ Philipp Otto Runge

(1777年7月23日～1810年12月2日) ポンメルン Pommern 地方のヴォルガスト Wolgast 出身。

グリム兄弟は、1812年の注釈の中で、ルンゲの名前のみを話の提供者としてあげている。この段階では、個々の話について個々の語り手ないし提供者をあげる必要性に気づいていなかったのである。それは、『少年の魔法の角笛』の編者のひとりであるブレンターノの指導によることであった。

ルンゲが提供した話は、次の二話である。

1812 : 19番「漁師とその妻」“Van den Fischer un siine Fru”

この話は、アヒム・フォン・アルニムの手を通してグリム兄弟に提供され、ヴィルヘルムが書き写した。

1812 ; 47番「ねずの木の話」“Van den Machandel-Boom”

この話も、19番同様、1810年のブレンダーノあての小包みには入れられなかった。なぜなら、この二話は、そもそもブレンダーノのすいせんでグリム兄弟の手に達したものだからである。

そしてこの二話は、グリム兄弟のメルヒェン再話法の模範とされ、1857年版まで保持されている。それがボンメルンの方言で書かれているがゆえに、純粋に民衆的な語り口と信じられたのであるが、ハインツ・レレケ Heinz Rölleke はその点に疑問をもち、近著において、次のように述べている。⁽³⁾

「ところが、グリム兄弟にとって、ほとんど規範的に思われたルンゲの聞き書きのなかに、実際問題として何があったのか、ということは、当然のことながら、以前から論争されている。一方の人たちの意見では、ルンゲの文章はけっして、まったく特定の方言で書かれているわけではない。ヴォルガスト出身のルンゲは、これらのメルヒェンを、たしかに故郷のボンメルンの方言で再話しようと努めたのである。だがしかし、その話が、子どもの頃の思い出にさかのぼるものなのか、それとも現存する語り手、あるいは過去の語り手の話にさかのぼるものなのか、それともまた、画家自身が、ハンブルクで、おそらくボンメルン方言でなく聞いた物語を、この方言に書きなおしたものなのか、定かではない。

他方の意見では、ルンゲがこのようなメルヒェンを（ブレンダーノや、のちにはヴィルヘルム・グリムがそうであったように）口で語ることが好きだったという、確実な証拠がある（「低地ドイツ語の豊かなファンタジーと子供らしさが、語ると、抵抗しがたい魔力をもって浮びあがってくるのです」）。その際もちろん、メルヒェンをつねに少しずつ変えていった。『語り変えた』のである。（「私がティークに事を打ち明けたら、ティークは、お話は、自分自身がルンゲの口から聞いたようにはできていなかった、いくつかの言い廻しとか、話のすじの動機さえ異っていた、と言いました。」）（1812年12月1日付、出版者ライマーからヴィルヘルム・グリムあての手紙）。

『漁師とその妻』のメルヒェンについてさえ、ルンゲが少くとも3回、異なる文章で書きおろしたという証拠がある。口伝えの話を、損わずに書物に書き表すことの問題を、ヤーコブ・グリムは、後年、『卵白がからにくっつかないようにして、卵を割ることが不可能なのと同じである』と書いているが（1812年12月31日、アルニムあて手紙）、その問題は、すでに、初期のルンゲの聞き書きに、きわめて尖鋭に現われていた。だが、グリム兄弟は、この具体的ケースについては、その問題を認めることができなかつたか、認めようとしなかつたの

である。このことによって、ルンゲが文体を勝手にいじりまわしていたこと、そればかりか、ばあいによっては、内容もいじりまわしていたことが、明らかである。その恣意的手入れは、もともになっている口伝えの話を知らなくとも、ある程度確実に認めることができる。」

しかし、グリム兄弟自身が、ブレンターノの強いすいせんを信頼し、このルンゲの文体を模範として、グリムメルヒェン集をつくりあげていったことは事実である。この事情については、ハインツ・レレケが詳しく調査し、『グリム兄弟のメルヒェン』（1985年）⁽³⁾に発表している。

第四節のまとめ

これまでの規準に従って、ルンゲの二話を見ると、次の如くである。

1812：19番「漁師とその妻」B、主人公は漁師の妻、結末はふりだしにもどる。

1812：47番「ねずみの木の話」B、主人公は男の子、相手はまま母。幸福な生活の獲得。

二話とも結婚の成就でないことが注目される。若い女性の語り手と異なる点がある。

グリム兄弟にとって初期の語り手は、これまで述べてきた人たちである。従来のグリム研究史では、この他に、ヴィルト家の家政婦であったマリー・ミュラー Marie Müller (1747～1826) を、グリム兄弟のメモにある「老マリー」であると考え、これを第一級の語り手としていた。しかし、ハインツ・レレケは1975年発表の論文『「マリーばあさん」の「きつすいのヘッセン」のメルヒェン⁽⁴⁾』において、それがヘルマン・グリム Herman Grimm (ヴィルヘルムの息子) の推測に基づく誤説であることを証明した。グリム兄弟は一度もマリー・ミュラーをメルヒェンの語り手として記したことがない。この間の事情はレレケの上述の論文に詳しいし、邦訳されているので、ここでは触れない。

第4章 初期に刊行物からとられた話と出典不明の話

KHM は、口伝えのメルヒェンをグリム兄弟が再話したものということが通説となっているが、「口伝え」という性格は、きわめて限定的にしかいえないことが、近年明らかになってきた。⁽⁵⁾ そのうえ、初期の段階、つまり1810年にブレンターノに手稿を送った段階からすでに、かなりの話を刊行物からとって

いるのである。これは、『少年の魔法の角笛』を同じように刊行物から多くとって手入れして編んだブレンターノの指導に従ったものと考えられる。1857年の決定版では、その数が、全 200話の約五分の1に当たるほど増大するのであるが、1810年版でのそれを明らかにしておく。

第一節 刊行物からとられた話

1810：1 番「王様と仕立屋と巨人と一角獣の話」“von einem König, Schneider, Riesen, Einhorn”

ヴィルヘルム・グリムはこの話を、ベルリンのブレンターノ宅で書き写させてもらった。従って、1810年に手稿を送ったとき、これは小包みに入れなかったのである。従って、エーレンベルクの修道院で発見された遺品の中にはなかった。出典は、マルティヌス・モンターヌス Martinus Montanus の『退窟しのぎ』Wegkürzer (1557年頃)であった。

この話は1812年版では20番のⅠとして採用された。20番のⅡとしては、1812年2月10日にカッセルのハッセンプフルーク家から寄せられた「ヘッセン地方の」断片が掲載された。1819(第2)版からは、もう一つの「ヘッセン地方の」話(提供者不明)とⅡが結合され、それに手入れしたⅠを加えて、一種の笑話メルヒェンとされ、20番に位置することとなった。1857年版まで保持。若者、王女との結婚成就。

1810：7 番「干枚皮」“Allerlei Rauch”

1810年版の7番は、ヤーコブの筆跡によるごく短い要約にすぎない。それは、ヤーコブ・グリムが、カッセルで、多分1807年の末に、カール・ネアリヒ Karl Nehrlich の『シリー』Schilly という長篇小説(1798)に組み込まれた話を書写したものである。グリム兄弟にしてみると、つい10年前に出版された本からとったことになる。

1812年版に採用されたのはこの話でなく、1812年10月9日、カッセルでドルトヒュン・ヴィルト Dorchen Wild から聞き書きしたものを主体にし、この7番を参考にしつつまとめた話であった。そしてそれは1857年版まで保持されている。主人公は娘、相手はママ母、王との結婚成就。

1810：8 番「貧しい娘」“Armes Mädchen”

1810年版の8番は、ヤーコブの筆跡による、ごく短い要約にすぎない。そして“J Pauls uns. Loge 1. p. 214 というメモが末尾にある。これはジャン・パウール Jean Paul の長篇小説『見えないさじき』Die unsichtbare Loge 1793の

「第17番目の領域」からの抜き書きである。1812年版では83番の位置を与えられ、アヒム・フォン・アルニム Achim von Arnim の短篇小説『三人のやさしい姉妹と幸運な染師』Die drei liebevollen Schwestern und der glückliche Färber (1812) 中のモチーフが使われている。1819年版からは、『星の金貨』Die Sterntaler と題名が変えられた。1811年以来、ヘッセンでは、Sterntaler とよばれる硬貨が使用されていた。グリム兄弟はそれを応用したのであろう。グリム兄弟自身の注釈書の153番の冒頭には、「ぼんやりした記憶によって書いた。誰かが補足し、修正してくれますように。」とあり、そのあとに、ジャン・パウルとアルニムの小説のことがメモ風に記されている。この「記憶」について、ハインツ・レレケは、注釈書の補足⁽⁶⁾において、次のように述べている。

「注釈の冒頭にある、ここにしかない言い方は、次のように解釈することができよう。すなわち、グリム兄弟は、子供の頃この話をゴットシャルク夫人から聞いた。(ヤーコブ・グリム、小論集Ⅰ, 103ページ) ということである。ところでこのゴットシャルク夫人は、医師と結婚していたので、彼女の話自体がすでにジャン・パウルの影響を受けていた、ということは、真実性を帯びうるのである。」

1810：18番「おろか者」“Dümmling”

筆跡はヤーコブ。これは、アルバート・ルートヴィヒ・グリム Albert Ludwig Grimm の『子供のメルヒェン』Kindermärchen (1808) の6番「三人の王子」Die drei Königssöhne から書写したものである。1812年版ではつくりかえられ、「蜜蜂の女王」Die Bienenkönigin と題名もかえられて、64番のⅡに位置づけられた。アルバート・ルートヴィヒ・グリムは、自分の「三人の王子」について、「類似の昔話への思い出によって」と書いている。それは、「騎士ブリソネット」の民衆本のことをさしているものと思われる。ゲーオルク・メッサーシュミット Georg Messerschmidt 「高貴なる騎士ブリソネットの話」Vom Edlen Ritter Brissoneto (1559)。1819年(第2)版以来、62番となる。主人公はおろかな若者、兄たち、王女と結婚成就。

1810：20番「龍」“der Drache”

筆跡はヤーコブ。マダム・ド・ヴィユナーブ Madame de Villeneuves の「若いアメリカ娘」La jeune Américaine の話を要約したものである。しかし1812年版には採用されず、そこでは、トライザ Treysa のフェルディナント・ジーベルト Ferdinand Siebert が語った話が、「夏の庭と冬の庭」Von

dem Sommer-und Wintergarten という題名で採用されている。主人公は末娘、相手は龍、じつは呪いをかけられた若者。結婚の成就。

1810：22番「金のかも」“Die goldne Ente”

筆跡はヤーコブ。この話はヤーコブが、『ボヘミアの古代の伝説』Sagen der Böhmischen Vorzeit (1808) から抜き書きしたもの。1815年第2巻の初版では49番『白い花嫁と黒い花嫁』Die weiße und die schwarze Braut として同類の話が掲載されているが、これは、「メクレンブルク地方より」とされる話（多分ハンス・ルードルフ・フォン・シュレーターにより提供された）と「バーデルボルン地方より」とされる話（多分ハクストハウゼン家により提供された）とを混合してつくった話である。そしてそれは1857年版まで保持されている。主人公は娘、相手はまま母。王子と結婚するが王子は荒れた生活で死亡。兄と妹で幸せな生活を獲得。

この話は、いかにも書かれた話らしく複雑で、グリム兄弟が1815年版に採用しなかったことが肯定できる。

1810：23番「ファンフルルッシュの首のメルヒェン」“Mährchen v. Fanfreluschens Haupte”

筆跡はヤーコブ。しかし1812年版にも1815年版にも採用されなかった。従って出典については、1810年の手稿の末尾にあるメモ以上には判明しない。そこには Reichard Rom. bibl. 17. pag. 64-70とある。ハインツ・レレケも、ライヒアルトという著者を指摘するのみで、Rom. bibl. 17. がいかなるものか、解明しえていない。

騎士が、魔法使いに金をだましとられ、彼を追跡して金をとり返し、首を切る。すると、首が地面に立ち上がって騎士をにらみつける。騎士が打ち割ろうとすると許しを乞うので打ち割ることをやめる。騎士が首を無視して歩いていくと川があり、首が先に渡っていく。血のすじが川を横切るので、騎士は殺人がばれると思って、もどる。すると首ももどってきて、あとをつけてくる。騎士が追うと逃げる。しまいには騎士はすわりこんで、首がどうにかするまで動かない、と言う。やがて首が、フランネルで自分をこすってくれと言うが、それは無いと言うと、では自分を抱いてくれと言う。騎士が首を抱こうとすると、首は騎士の鼻にかみついてぶらさがる。しまいには頭にまたがる。どんなにぶっても、たたいてもとれないので、騎士はこの世の誰よりも困りはてた。

これは妖怪話である。枯骨報恩譚の逆の進展をもつ話である。グリムが集めようと考えていたメルヒェンとは、大いに趣きを異にすると感じられたのである。

う。主人公は騎士、相手は首。結末は首に苦しめられたまま終る。

1810：28番「すずめの物語」“Geschichte vom Sperling”

この話はヴィルヘルムが1809年、ベルリンのブレンターノ宅で写してきたものなので、1810年の手稿の小包みには入れられず、従ってエーレンベルク修道院の遺品の中にはなかった。

1812年版では35番に「すずめと四羽の子ども」Der Sperling und seine vier Kinder として採用されたが、1819年（第2）版に際しては、157番に移された。題名は不変で、1857年版まで保持された。

出典はヨーハン・バルタザール・シュピウス Johann Balthasar Schuppius の作品の中の「おとぎのハンス」Fabul-Hanß (1660) である。アヒム・フォン・アルニムは同じ話をすでに1810年、長篇小説『ドロレス侯爵夫人』の中で、「経験の学校」Schule der Erfahrung という題で使用している。主人公はすずめたち。平和な生活を獲得。

1810：31番「年とった魔女」“Die alte Hexe”

筆跡はヤーコブ。この話は初版で発表されなかった。出典については、手稿の末尾に、「美しい、眠り男、ラングバインの祭日の夜のメルヒュン、フランクフルト、1794、第1部、1～68ページ」Der schöne Schläfer ein Märchen in Langbeins Feierabenden. Frankf. 1794. Th. 1. p. 1～68. とある。

グリム兄弟にとって新しい本である。

こよなく馬を愛する王にメネ Mene, ベネ Bene というふたりの王女がある。メネが散歩していると、かぎが地面から出てきて手に着き、とれない。山の岩の所で穴にとびこむ。中には美しい部屋があり、王子が眠っている。わきに「この人をほしければ、怪物を愛しなさい」と書いてある。メネは金色のくもの糸を切る。すると風が吹いて穴から追いだされる。帰途、ベネに出会う。ベネのまわりを美しい鳥が飛びまわり、宝石をおとして、「大切にしなさい」と言う。メネが取ろうとして争っていると、やめろと声がする。背中のみらいこびとである。メネはこびとにへつらうが、こびとが行ってしまうと悪口を言う。ベネはこびとを追いかけて注意する。ベネが山のせまい道を行くと、よろめきながら来た老魔女にぶつかる。魔女の五体は四散し、頭が、五体を組み立てると言う。ベネが言われたとおりに再び組み立てると、生き返った老魔女は礼を言い、「美しい夫を迎えられるだろう」と言う。ベネは失った宝石を捜す。鳥がみつめてきてくれて、二度となくすなと言う。王妃はメネの希望を入れて、みにくいこびとを婿として招くが気に入らない。ベネは森の中で老魔女に

出会う。彼女はおろかな王子を連れてきてくれるが、ベネは気に入らない。貧しい、しかし、かしこいこびとに出会い、愛していると言うと、こびとは美しい若者に変身する。魔女がおろかな息子を連れて城から出てきて、ベネの髪の毛をつかんで百マイルも飛び、かたつむりのたくさん住む塔におろし、一週間以内にかたつむりにダンスを教えなければ、お前もかたつむりになると言う。ベネはかたつむりと親しくなるが、ダンスは教えられない。7日目の朝、鳥が宝石をもってきてくれて、もう2度ともってきてやらないと言う。宝石の中から12人のこびとのダンス教師がでてきて、かたつむりにダンスを教える。ベネを失った王子は魔法の長ぐつで塔に近づく。魔女はかたつむりがうまくおどるので驚くが、口実を設けてベネを釈放しない。ベネが悲しく窓から外を見ると、王子が立っているのだから、宝石を投げおろす。王子が受取るとそれは刀になり、塔に入って魔女を殺し、かたつむりにふれる。するとかたつむりは娘たちになる。ベネの父である王は、娘婿が馬をのりこなしたので気に入る。

この要約でもわかるように、口伝のメルヒェンにはありえない複雑な話である。グリム兄弟が初版で採用しなかったのは首肯される。主人公は娘、相手は魔女、王女との結婚成就。

1810：33番「ねずみと焼きソーセージ」“von Mäuschen und Bratwurst”

この話は1810年にブレンターノ宛の手稿小包に入れられなかったもので、保存されていない。グリム兄弟は、ハンス・ミヒャエル・モッシュェロッシュ Hans Michael Moscherosch の作品『ジッテヴァルトのフィランダーの物語』Geschichte Philanders von Sittewald (1650)からこの話を取って手入れしたのだが、ブレンターノはそれより前、1806年7月11日の『週刊バーデン』Badische Wochenschrift に、やはりモッシュェロッシュの作品に手入れした話を発表していたからである。グリムの手入れした話は、当然その影響を受けていたものと思われる。1812年版には23番「ねずみと小鳥と焼きソーセージの話」Von den Mäuschen, Vögelchen und der Bratwurst として採用され、そのまま1857年版まで保持されている。主人公はねずみ、小鳥、ソーセージ。みな死んで終る。KHM にしては珍しく、悲劇的結末である。

1810：37番「モルモット」“Murmeltier”

筆跡はヤーコブ。1765年にマダム・ヴィユナーブ Mad. Villeneuve の小説のドイツ語訳が、「若いアメリカ娘」Die junge Amerikanerin というタイトルで出版された。ヤーコブは、20番と同じくその中からこの話を抜き書きしたのである。1810年には、他の話と共にブレンターノに送られたが、1812年版に

は採用されなかった。一方、ブレンターノは、この抜き書きにもとづいて、「モルモットのメルヒェン」*Märchen vom Murmelthier* を書いたのである。

1819年、ヴィルヘルムは、ある書評の中で、ヘッセンとチューリンゲンのほとんど全領域で、ホレ婆さんの話が語られていることを認めている。

1812年版に際しては、1811年10月13日に、カッセルで、ドルトヒェン・ヴィルトが語った話が、24番として採用された。1819年からは、ハノーファー Hannover のゲーオルク・アウグスト・フリートリヒ・ゴルトマン Georg August Friedrich Goldmann から寄せられた話のいくつかのモチーフ（にわたりの歓迎のことばなど）と結合された。

1810年の37番は、前半は、「ホレ婆さん」*Frau Holle* とほとんど同じで、そのあとに、さらにまま子への困難な問題がつつき、まま子はそれを全部解決して、王子と結婚する。主人公は娘、相手はまま母。しかし、いかにも書かれた話らしく、複雑な構成で、口伝のメルヒェンのジャンルには入れがたい。1812年版で採用されなかったことは、首肯できる。

1810 : 38番「ナイチンゲールとアシナシトカゲの話」“*Von der Nachtigall und der Blindschleiche*”

ヤーコプの手稿は、手違いでブレンターノに送られなかったか、または、ブレンターノの手許から紛失したものと思われる。エーレンベルク修道院の書庫からは発見されなかった。

1812年版では6番に採用されている。ナイチンゲールとアシナシトカゲが仲良くいっしょにくらしていた。あるとき、ナイチンゲールが結婚式に招かれ、一つ目で行くのはいやだから、目を貸してくれと、アシナシトカゲにたのみ、借りて行く。ナイチンゲールは目が2つあることが気に入り、翌日になっても返さない。そして高い木の上へ逃げていく。それだから、ナイチンゲールは目が2つあり、アシナシトカゲには目がないのである。そして、ナイチンゲールのいる木の下には、いともアシナシトカゲがいて、卵を食べてやろうとねらっているのである。

1812年版の本人使用本には、この話に「削除」という記号がついていて、1819年版からは削除された。1812年版につけられたグリム自身の注によれば、フランス語から翻訳したとのことである。(Mémoires de l'academie celtique, Tom 2, 204. 205.)

主人公は動物、相手も動物。目の由来話。

第一節のまとめ

以上の話を、従来の規準でまとめると次の如くである。

1810：1番「王様と仕立屋と巨人と一角獣」B，若者，王女との結婚成就。

1810：7番「千枚皮」D，娘，まま母，王との結婚成就。

1810：8番「貧しい娘」B，娘，神，幸せになる。

1810：18番「おろかな者」B，おろかな若者，兄たち，王女と結婚成就。

1810：20番「龍」D，末娘，龍，じつは呪いをかけられた若者。結婚成就。

フランス語からの翻訳。

1810：22番「金のかも」D，娘，まま母。兄妹の幸福な生活を獲得。

1810：23番「ファンフルルッシュの首のメルヒェン」D，騎士，首。苦しめられて終る。

1810：28番「すずめの物語」B，すずめたち。平和な生活を獲得。

1810：31番「年とった魔女」D，娘，魔女，王子との結婚成就。

1810：33番「ねずみと焼きソーセージ」B，ねずみ，鳥，ソーセージ。全滅して終る。

1810：37番「モルモット」D，娘，まま母。王子との結婚成就。

1810：38番「ナイチンゲールとアシナシトカゲ」C，動物対動物。由来話。

こうしてみると、刊行物からとった話のなかでも、結婚成就の話が多いことがわかる。12話中6話。50%である。

そして、1857年版まで保持されたものは少く、12話中5話にすぎない。

保持されたもののうち、結末はどうなるかをみると、結婚成就2話。幸福な結末2話、全滅1話である。ここでも結婚成就、幸福な結末の話がさがしだされていることがわかる。刊行物から選びだすばあいには、明らかに、グリム兄弟の選択眼がはたらいているのであるから、彼らの求めていたメルヒェンがいかなるものであったかを、かなり正確に示していると考えてよからう。

初期の段階で刊行物からとられたものが12話もあることは、明らかにブレンターノの指導によるものと思われる。しかし、そのうち決定版まで保持されたものは5話にすぎないのだが、最終的にみると、第六版、第七版の段階に至って、再び、刊行物からの話がふえ、40話に達するのである。このことは、のちに改めて確認することとする。

第二節、出典・語り手不明の話

ハインツ・レレケの最近の研究をもってしても、1810年版のうち次の19話は

出典ないし語り手不明である。

6番「おおかみ」“Der Wolf” 筆跡ヤーコブ

9番「血入りソーセージ」“Blutwurst” 筆跡ヤーコブ

11番「兄と妹」“Das Brüderchen und das Schwesterchen” 筆跡ヴィルヘルム

12番「親指小僧」“Daümling” 筆跡ヤーコブ

13番「おろか者」“Dümmling” 筆跡ヴィルヘルム

15番「おろか者」“Dummling” 筆跡ヤーコブ

17番「三人の王子」“Die drei Königssöhne” 筆跡ヴィルヘルム

25番「王女と魔法にかけられた王子。蛙の王様」“Die Königstochter und der verzauberte Prinz. Froschkönig” 筆跡ヴィルヘルム

27番「金のがちょう」“Goldne Gans” 筆跡ヤーコブ

29番「ヘンデ氏」“Herr Hände” 筆跡ヤーコブ

32番「金のおじか」“Goldner Hirsch” 筆跡ヤーコブ

35番「ねずみ皮の王女」“Prinzessin Mäusehaut” 筆跡ヴィルヘルム

39番「よい膏薬」“Das gute Pflaster” 筆跡ヤーコブ

40番「三羽のからす」“Die drei Raben” 筆跡ヤーコブ

42番「ルンベルシュトゥンツヒェン」“Rumpelstünzchen” 筆跡ヴィルヘルム

43番「白雪姫」“Schneeweißchen” 筆跡ヤーコブ

注

- 1) Jugendbriefe der Brüder Grimm, 1963 S. 160 ヴィルヘルムよりヤーコブへ、1809年（9月18日付）
- 2) Steig, Reinhold: Clemens Brentano und die Brüder Grimm 1914. S. 117
- 3) Heinz Rölleke: Die Märchen der Brüder Grimm, Artemis. 1985, 55ページ
- 4) 『現代に生きるグリム』岩波書店、1985、所収
- 5) H. Rölleke: 上掲書
H. Rölleke: Grimm Kinder- und Hausmärchen 2 Bde. Eugen Diederichs. 1982
小澤俊夫；『素顔の白雪姫』光村図書、1985
- 6) H. Rölleke: Grimm Kinder- und Hausmärchen, Band 3. Reclam, 1980. 502ページ